

「聞きたい。」 大島幹雄さん

サーカスは私の「大学」だった

(こぶし書房・1890円)

ロシア演劇の研究者になるつもりが、大学院の入試に失敗した。腰掛けのつもりで入った会社で、旧ソ連から招聘したサーカス団の地方巡業に同行。ろくにロシア語もしゃべれないまま、丸3カ月、熊の餌の手配などに明け暮れた。公演を終え、その熊が横浜港で檻ごと荷揚げされるのを見て、涙がこみあげた。結局、そのまま会社に居付いた。そして「サーカスが私の「大学」」となった。

いまの会社に移ってから、本業の公演プロモーションに加え、道化師などの「サーカス文化」に関する著述を盛んに行っている。本書もその一冊だが、タッチは軽妙。これまでの「サーカス人生」でのさまざま



さまざまな出会い、軽妙なタッチで

な出会いを綴ったエッセー集だ。インディアンロープの達人、横浜・野毛の大道芝居、「呼び屋の東大」……。「出会いが会いを呼んで」、道化師のように読む者を飽きさせない。

近年は「石巻若宮丸漂流民の会」の事務局長も務めている。江戸時代、生まれ故郷・石巻の千石船乗組員が難破し漂流、ロシアにたどり着き、遣日使節とともに世界一周の航海を経て帰国を遂げたという史実がある。地元でも知る人は少ないが、帰国のために乗り組んだ船名が「ナジェーシダ(希望)」だった。

東日本大震災で生まれ故郷は大きな被害を受けた。「苦境に直面している石巻の人たちに、勇気の出る何かができないか」

『石巻日日新聞』に連載小説の企画を持ち込んだ。震災直後、手書きの壁新聞で情報を伝えた夕刊紙だ。タイトルは「我にナジェー

シダ(希望)ありー石巻若宮丸漂流民ものがたり」。小説を書くのは初めてだったが、昨年4月から週5日掲載。いまも連載を続けている。「希望は大事です」

気がかりは、大津波によって故郷から「共同体」が消えかねないこと。「一つのアイデアだけど、場づくりのために(サーカスの)テントを被災地につか建てられないかなあ」

還暦を過ぎ、フィルカツツ(サーカス野郎)らしさはいや増している。(山根聡)

◇ (おおしま・みきお) 昭和28年、宮城県石巻市生まれ。早稲田大ロシア文学科卒。海外のサーカスや大道芸など身体表現エンターテインメントを企画・招聘する「アフタークラウディカンパニー」のプロデューサー。雑誌『アートタイムズ』主宰。著書に「サーカスと革命」など。横浜在住。